

11月6日、秋晴れの名古屋港ガーデン心頭広場を会場に、愛知BIGフェスティバルが開催されました。3年ぶりの「フルスペック開催」とあって、100店もの模擬店テントが広大な会場いっぱい広がる中、ステージ発表、ダンスフェスや玉入れ大会など100以上の団体、全体で5000人が参加しました。ハイライトの「希望プロジェクト」は中高生500人の群舞を中心に、和太鼓、ダンス、オーケストラ、コーラスにチア・バトンや父母のクラッピングも加わり総勢1000人による、まさに「総合芸術」。この瞬間、この場所にこめた高校生の思いを、列席した大村愛知県知事もしっかりと受け止めていました。



【誉高校 福川さんの弁論より】

2年前の4月、私たちはコロナとともに高校へ入学しました。入学式を終えた私たちを待っていたのは、2か月間の休校。思い浮かぶクラスメイトの顔はいつもマスクで覆われていました。再開された学校生活でも私たちを待っていたのは【制限】の二文字。私たちを守るための言葉が、私たちを苦しめました。短縮、延期、中止…。この言葉が3年間、私たちを取り巻いていました。それでも希望を捨てなかった。私たちの高校生活は私たち自身の手で作上げる！

今年、2年間中止されていた文化祭が復活しました！3年生にとっては高校生活、最初で最後の文化祭。各フロアが日に日に彩られ、みんなの笑顔と笑い声で校内に花が咲きました。校舎周りに立ち並ぶ模擬店テント、中庭に設置された特設ステージ。高校生活3年間で初めての光景を私は目にしました。私たちの学校生活は誰にも脅かされない。私たちの手で守り、作り上げます。

今、私たちの学校に対する思いは、一層強くなりました。つながることが困難だったからこそ、みんなで学校をつくり上げることの喜びを感じています。よりよい学校にしたいという思いは、校則改善の動きにもつながっています。



【南山男子 越元宰輔 高フェス実行委員長の弁論より】

この高校生フェスティバルの活動を通して、「仲間」と思える存在ができました。安心できる仲間が、安心できる場所が、「変わりたい」と思っていた僕の背中を押してくれました。

自分は、自分でいいんだって思えるようになりました。みんな、どこかに、弱さを持っている。みんな、心に不安や悩みを抱えながら、それでも、精一杯生きている。僕にはできなかった、「自分らしく生きる」みんなの姿。それが、人間の強さであり、人間の尊さだと思うと、人を見る目が、変わりました。

人の心が動けば、社会は変わっていく。今まで、逃げてきたけれど、少しだけ、人間が好きになりました。「人は、変わることができる」。僕は、そう確信しています。自分を変え、思いを伝えたら、誰かに届く。そこから、思いがつながり、何かが変わっていく。困難な状況も、変えていける。コロナ禍を乗り越えて、やっと、つくることができた、今日のこの景色。「これを待っていたんだ！」「みんなの笑顔が見れた！」

みんなの輝きに心から喜びを感じて、僕は、実行委員長として、いま、誇りをもって、ここに立っています。



かばんは肩掛け・マフラーに規定… 校則 自分たちで見直そう



校則改革の現状も紹介されたビッグフェスティバル＝6日、名古屋港区

名古屋 総合文化祭で取り組み紹介
かばんは肩掛け、マフラーの長さの上限は160センチ程度…。全国各地で生徒自らが学校の校則を見直そうと動くなか、県内でも取り組みは活発だ。

「動けば何かが変わる」

6日に名古屋港区であった「ビッグフェスティバル」。県内の中学校でつくる総合文化祭で、私立学校の生徒代表が1チーム4校の校則の見直しをめぐる取り組みを紹介した。

愛知産業大学工業高校（名古屋市中区）では、学校指定の肩掛けかばんでの通学だったルールを、2023年度からはリュックでも可能とするよう学校側と検討を進めている。「肩掛けかばんでは荷物が入りづらい」といった声がかかった。生徒会が中心となって校内アンケートをとり、賛成多数の結果を携えて交渉しているという。

改革に挑む東江寛弥さん（18年）は、実現しても来年度からなので3年生は恩恵を受けられないけど、未来のために動いた。動けば何かが変わるという。

冬に冷え、マフラーの規定の改善を目指すのは愛知淑徳中学（岡崎市緑区）。生徒たちは昨年からは校則改定実行委員会をつくり、校則の見直しを進める（160センチ程度、幅20センチ40センチ）があり、多くの市販品は含まなかった。

さらに、マフラーの先端を、上半身を覆う「トップバコー」のなかに入れなければならないという決まりも、首付近が苦しかったり、動くたびにマフラーが引きついたりするかわりしがあるという。

南山高校女子部（同市昭和区）では、制服の着用を許可してほしいという要望も生徒の中にあるという。合わせて議論のテーマになっているという。改革に関わる土井美穂さん（18年）は「活動は大変だけれど、自分たちで学校をめぐっているというやりがいを感ずる」。

名古屋高校（同市東区）は、快適さを求めて、制服にボロシャツの導入を目指して議論を重ねていると報告した。今夏に試験導入し、本格導入するかどうかは決まっていない。

スピーチした生徒代表は「学校がよくなることは社会がよくなるという一歩」と力を込めた。（土井美穂）